

〔大豆〕

1. 作付の概況

本年度の作付面積は全国で145,400haで、前年より1,700ha減少した（前年比99%）。九州では23,000haで前年比98%と、全国と同様にやや減少した。県別では、長崎県で3%増加した以外は各県とも減少した。

2. 作況の概況

本年は主産地の一つである福岡県で、播種適期の7月上旬・中旬に降雨が続いたため、播種が遅れた地域が多かった。さらに、北部九州は7月24～26日に豪雨に見舞われ、福岡県で大豆圃場約2400haが冠水するなど、多くの圃場では冠水、滞水を生じた。このため、播種後間もない圃場では出芽不良、その他の圃場では生育初期個体の枯死などの被害を生じた。特に被害の大きかった圃場では、8月上旬を中心に再播種が行われたが、その面積は福岡県で約600ha、佐賀県で約300haに達した。再播種を行わなかった圃場においても、一部の個体の枯死や土壌過湿による茎葉と地下部の生育抑制が、作柄を下げる原因となった。

8月後半から約1ヶ月間は少雨・多照の地域が多く、生育がかなり回復した一方、干ばつ傾向が着莢に影響した場合があったと考えられた。10月7日には台風18号が九州東方海上を通過し、風による急速な萎凋や倒伏の増大が生じた地域もあったが、全体的には被害は少なかった。ハスモンヨトウ、カメムシによる被害は北部九州では比較的少なかったが、長崎県南部ではミナミアオカメムシによる被害の拡大が見られ、南部九州ではカメムシによる一部青立ち等の被害が報告されている。以上の結果、多収年であった前年に比べ、10a当たり収量は北部の福岡、佐賀、長崎、大分の各県では減少し、熊本、宮崎、鹿児島各県では増加した。九州全体では、主産地である北部九州の作柄の影響が大きく、収量は前年比89%であった。ただし、台風による甚大な被害がなかったことから、平均収量に対する対比は114%となった。なお、全国の収量は前年比88%であったが、減収の主な要因として、北海道の7月中下旬の低温・寡照・多雨、東海地域の台風害とともに、北部九州の7月下旬豪雨が挙げられている。

収穫量は、作付面積の微減と10a当たり収量の減少により、全国では前年比87%に減少し、九州でも同様に前年比88%となった。

（九州沖縄農業研究センター大豆育種研究九州サブチーム 高橋 幹）

2009年度大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当収量	収穫量	10a当平均収量	前年との比較				
					作付面積		10a当収量	収穫量	
					対差	対比	対比	対差	対比
全国	145,400	156	227,000	95	△1,700	99	88	△34,700	87
九州	23,000	191	43,900	114	△400	98	89	△6,200	88
福岡	8,030	181	14,500	106	△80	99	84	△3,000	83
佐賀	8,840	230	20,300	121	△160	98	91	△2,500	89
長崎	534	142	758	102	△14	103	79	△178	81
熊本	2,900	181	5,250	120	△90	97	106	△170	103
大分	2,020	106	2,140	99	△70	97	74	△850	72
宮崎	333	152	506	122	△28	92	130	△84	120
鹿児島	323	135	436	99	△13	96	111	△26	106
沖縄	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注) 農林水産省大臣官房統計部「農林水産統計」(平成22年3月20日公表の概数)より引用。